

音源の比較試聴(4)
—ワーグナーのワルキューレ—

1. 始めに

前報(3)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりです、今回からそれらの対策の効果を総合的に確認していきます。

音源は、各種フォーマットのワーグナーのワルキューレの第3幕ワルキューレの騎行を聴いていきます。

アナログ

LONDON KLJC-9180/9184 (RTI/キングレコード)

リヒャルト・ワーグナー ワルキューレ全曲
ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィル

LONDON SLC 8053

リヒャルト・ワーグナー ニーベリゲンの指輪 オーケストラハイライト
ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィル

LONDON L00C 1504/8

リヒャルト・ワーグナー ワルキューレ全曲
ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィル

STAGE+

リヒャルト・ワーグナー ワルキューレ全曲
コルネリウス・マイスター指揮バイロイト祝祭管弦楽団

ベルリンフィルデジタルコンサートホール

リヒャルト・ワーグナー ワルキューレ
サイモン・ラトル指揮ベルリンフィル

CD

SONY Classics SICC 1172

リヒャルト・ワーグナー 管弦楽集
マリス・ヤンソンス指揮バイエルン放送管弦楽団

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤と CD は、再生前に CD クリーナーで処理します。

アナログ盤 3 枚は、いずれもワーグナーファンのオーディオ仲間からいただいたので、LINN LP-12 で再生します。そのうち、LONDON L00C 1504/8 盤は TohrensTD124 と Garad401 でも再生します。

まず、LINN LP-12 での再生ですが、RTI/キングレコード盤は、アースアキュライザーの評価で試聴してきたものです。この盤は、Direct Connecting 方式でカットティングしなおしたもので、TAPE レコーダーのアンプからカットティングアンプに直結してカットティングされたものです。それ故、レベル調整や位相調整がなされておらず、収録環境のエコーの状況などがそのまま反映されていて、音響的な調整がなされていないところがありますが、不思議な特有の鮮度感があります。

LONDON SLC 8053 盤は、ハイライトを集めたオムニバスもので、音は整理されていますが、RTI/キングレコード盤より鮮度感が後退しています。

LONDON L00C 1504/8 盤は、おそらく初期の全集だと思われませんが、音は整理されつつも鮮度感が失われておらず、歌手の前後左右の位置関係はもっとも明瞭です。

このように、盤毎の微妙な差を描き分けられるようになっています。

そして、LONDON L00C 1504/8 盤を TohrensTD12 で再生しますと、これまでのダイナミックであるが、やや緻密さが不足するところが払拭されて、ダイナミズムは維持したまま、LP-12 の緻密な再生に近づいています。

LONDON L00C 1504/8 盤を Garad401 で再生しますと、これまでの真空管フォノステージのまったりとした音から、ゲインは不足気味であるものの、緻密さや切れ味も LP-12 の再生に近づいてきています。

以上のように、プレイヤーやカートリッジやフォノステージの個性は保ちながら、全体的にレベルが上がってきています。

STAGE+のマイスター指揮バイロイト祝祭管弦楽団の再生は、2022 年のバイロイトでの収録です。現代風の演出で収録が新しいだけあって Brooklyn DAC+にアースアキュライザーで Crystal E を接続する効果が十分に発揮されています。バイロイトの生収録だけあって、歌手達の声はよく通ってダイナミックですが、オーケストラは、恐らくワーグナーピットでの演奏ですので、やや音はこもりがちです。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのラトル指揮ベルリンフィルの再生は、2012 年の演奏会形式での収録です。しばらくぶりの再生で、Brooklyn DAC+にアースアキュライザーで Crystal E を接続する効果とそれ以前の LAN アキュライザーは Crstal EpL や LAN iSilencer やフェルトダンプ LAN 端子の効果も合わさって様変わりしており、演奏会形式でありながら、歌手達の歌唱も迫力があります。

CD は、ヤンソンスがバイエルン放送管弦楽団を率いて来日したときの演奏会で求めたもので、管弦楽のみのライブ収録 CD です。EMT981 と CD ドライブ→fidata

HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→の TruPhase 2 経路で再生しますが、EMT981 の方は Brooklyn DAC+を経由せず、TruPhase にバランス入力しています。

CD の EMT981 による再生は、アースアキュライザーの効果が及ばない再生経路ですが、もともと EMT981 の再生能力が高いので、演奏会の雰囲気を出させてくれます。

CD の fidata HFAS1-S10 経由の再生は、PC 用の CD ドライブからの再生で、これまで EMT981 による再生に比べて一段劣る音質でしたが、Brooklyn DAC+にアースアキュライザーで Crystal E を接続した効果で様変わりしており、EMT981 の再生に肉薄してきています。

4. まとめ

アナログプレイヤー3機種によるアナログ再生、2つの配信サイトからのストリーミング再生、2経路のCD再生のいずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成の結果、すべて効果が明白に現れ、格落ちするような再生経路はなくなったことが確認できました。

以上